

島を未来につなぐために

ー長崎県小値賀島の「おもてなし」を活かしたアイランドツーリズムの取り組みー

本田 祐希

現在「島旅」が注目を集めている。島への観光的関心が増加する一方で、少子高齢化をはじめ、離島が抱える課題は本土よりも深刻であり、多くの小規模離島が無人島に近い状況になることが懸念されている。そのような中で「内発的な地域づくり」につながる「観光」のあり方への期待が高まっており、本論文ではその先進事例として知られる長崎県小値賀島の「おもてなし」を活かしたアイランドツーリズムを考察した。研究方法は、現地調査に基づく関係者へのインタビュー、文献・資料およびインターネットを用いた調査による。

具体的には、小値賀島において観光を通じた島の活性化に大きな役割を果たしている「NPO 法人おぢかアイランドツーリズム協会」を中心に、合わせて山形県飛島「合同会社とびしま」、沖縄県伊是名島「NPO 法人島の風」の事例を分析した。その結果、3島の共通点として、島の原風景を残すことが島おこしであるとの理念にもとづき、島を守るための手段として観光事業を推進し、島に暮らす目線を大切にして、それを活かしたガイドや古民家再生事業を進めていることが明らかになった。小値賀島に独自の点は、SNS を用いて外国人の受け入れを重視し、民泊や体験型観光などで実際に島民のおもてなしに接する機会を設けている点である。

小値賀島においては、島のありのままの姿に目を向け、島民の「おもてなし」の心に焦点を当てて、人と人との交流を重視した観光事業を展開できたことが、島の活性化につながったと考えられる。再び小値賀島に訪れたい観光客が多いのは、そこが「島民の地元愛を感じる場所」だからであろう。島民は、自分達の住む島が大好きで、他の人にも知ってほしいという思いを持っている。アイランドツーリズムを通じて、いっそう島民の地元愛が育まれ、それがおもてなしの気持ちにつながっている。島を未来につなげるためには、地元愛を感じるおもてなしこそが、今後、重要になってくることだろう。